

霧多布小学校が参加した広域交流型オンライン社会科学習に  
社会科教育実践分野の学生が支援員として関わりました

【サムネイル画像（児童の顔マスク処理済）】



広島県・高知県・鹿児島県の小学校とZoomでつながる  
第4学年・広域交流型オンライン社会科学習  
「自然災害からくらしを守る：防災訓練だけで備えは十分か！？」



## 【本文】

2024年9月11日(水)、広島県・高知県・鹿児島県・北海道の小学校、合計14校18学級がZoomでつながる広域交流型オンライン学習・第4学年「自然災害からくらしを守る：防災訓練だけで備えは十分か!？」(2時間)が実施されました。北海道からは、浜中町立霧多布小学校が参加し、第4学年の渡辺達樹教諭に実践協力をいただきました。

本授業には、北海道教育大学釧路校・社会科教育実践分野・社会科教育学ゼミ4年の平村花奈さんが観察員として、2年の佐々島忠佳さんが学習支援員として関わりました。学生がどのような学びを得たのか、以下で共有します。

こうした実践的な学びを釧路校の学生に提供してくださった浜中町立霧多布小学校の渡辺達樹教諭をはじめ、遠隔でつながった学校の先生方、そして広域交流型オンライン学習をコーディネートしている広島大学教育ヴィジョン研究センター(EVRI)のスタッフの皆様にご感謝申し上げます。なお、本授業の指導案や授業記録は、EVRIの公式HPにアーカイブ化されております。併せてご覧ください。

## 【指導案や授業記録】EVRIの公式HP

[https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/class\\_practice/20240911/](https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/class_practice/20240911/)

## 広域交流型オンライン学習

「広域交流型オンライン学習」とは、広島大学教育ヴィジョン研究センターが2021年度より東広島市教育委員会と連携して実施されてきたプロジェクトです。2023年9月、内閣府が実施する「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」の第3期「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」の採択を受け、「デジタル・シティズンシップ・シティ：公共的対話のための学校(通称:NICE)」プロジェクトとして発展しております。NICEプロジェクトを含む「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」の採択課題は、いずれも研究開発の成果を北海道に実装することを最終ミッションとしています。



北海道教育大学釧路校では、へき地小規模教育研究センターが中心となり、遠隔教育を実践できる現職教員や教員志望学生の力量形成を支援しています。その一環で、釧路校・社会科教育学研究室の講師・玉井慎也先生は、広島大学教育ヴィジョン研究センターと連携しながら、NICEプロジェクトに北海道の学校が参加できるように支援したり、広域交流型オンライン学習を観察・支援する釧路校の学生の成長を調査したりしています。また、令和6年度・へき地小規模校教育研究センターの研究助成を受け、「北海道内のへき地・小規模校を繋ぐ広域交流型オンライン社会科学習に向けた地域教材動画の制作」に取り組んでいます。

## 【佐々島忠佳さん】

霧多布小学校での実践に参加して、広域交流型オンライン学習を実践する上での教師や支援員の立ち振る舞いや、動画では見えない事前・当日の準備を学ぶことができました。今回私は、ICT・学習支援員として実践に参加させていただき、主に児童が発表する際の補助（ミュート解除や立ち位置の誘導、マイクの手渡し）やタブレット操作の支援をしました。私自身、1年前に同じ単元で実施された霧多布小学校での広域交流型オンライン学習を観察員として参加させていただき、また大学の講義では広域交流型オンライン学習の指導案を分析したり、ハイライト動画を分析したりする活動に取り組んできました。今回初めて直接授業者と同じ目線で運営・支援に関わらせていただき、多少の不安を抱えていましたが、大学の講義やゼミ活動で習得したICT機器活用スキルを活かし、授業を円滑に進める一助を担うことができたと考えます。はじめは児童が発表する際に自分がどこにいたらよいかかわからず、児童とカメラの距離感が合わないことがありましたが、児童がカメラの正面に立つことができるような自身の立ち位置を考えながら臨機応変に対応し、当日の支援業務の中でも成長を実感できる機会となりました。

1年前の自分と比べると、1年前は「児童は提示された課題をどのように考えようとしているのか」、「児童はICT機器をどの程度使うことができるのか」、「先生はどのような支援を行っているのか」などと児童や先生の動きを中心に授業を観察していましたが、今回は支援員として、「どのタイミングで操作すると授業が円滑に進むのか」、「児童の学習の妨げにならない立ち位置はどこか」、「考える時間になったら担任の先生はどのような動きをしているのか」などと授業者の動きを中心に観察することができ、教室空間を分析する視点が変化したことによって授業の見方が変わると感じました。また、将来自身が先生になった際、ICT機器を活用した授業でどのような動きをしたら授業を円滑に進めることができるか、児童に深い学びを促すことができるのかを考えることができました。さらに、ICT機器の活用だけでなく、黒板も併用して学習を効率的・効果的に進められるように、児童が学びを深めるためにICT機器と黒板の使い分けに関心が湧いてきました。

今回の観察・支援を通して、広域交流型オンライン学習の良さは、①他地域の取り組み（今回は防災）に触れることで、住んでいる地域の特色だけでなく他地域の特色を学ぶことができ、自分の地域をより良くしようとする態度を養うことができる点、②教科書に載っていても授業では扱っていない内容（今回であれば津波・噴火・土石流）を理解することのできる点、③発表する機会が多いため児童が普段よりもやる気を持って積極的に学習に取り組むことができる点にあると感じました。一方、課題としては、①接続や音声面での不具合によって授業の進行に遅れが出るという点、②ブレイクアウトルームでの意見交流・考える時間の確保が難しい点、③アンケートやGoogleスライドでの学習活動が中心で配布されたワークシートを活用しきれない点にあると感じました。

今後の展望としては、小学校現場での主免教育実習を1年後に控えているので、今回学んだICT機器と黒板を併用する授業展開の計画・実践に取り組むための力を鍛えていきたいです。また、将来先生になった際に広域交流型オンライン学習に授業者の1人として参加したいと考えているため、機会があれば今後も引き続き広域交流型オンライン学習の観察・支援に積極的に参加し、先生や支援員の動き、効果的な指導法を学ぶとともに、多くのICT機器活用スキルを習得したいです。